

実現できなくなるかもしれません。(第一の誓い)」

我々が浄土の中に住んでいることが法身の誓いの実行によって保証されていることは、計略や「もし」という考えに私たちが囚われてしまうことを防いでくれています。

法身が実行されることによる解放とは阿弥陀による計らいであり、それは自力を超越し他力として存在するのです。

ところが親鸞聖人は浅はかな計算高さを取り除くことは出来ないことを見抜かれておられました。そして相容れないはずの計らいと阿弥陀仏の他力(計らい)をどちらも受け入れてしまったのです。

「全ての計らいは阿弥陀の本当の計らいではない(親鸞聖人)」

親鸞聖人をはじめとして、愚かな存在である私たちは浅ましい計らいの考えから永遠に逃れられないのではないのでしょうか。「もし」という言葉はいつでも心の前面に居座るでしょう。しかし、だからと言って啓蒙

のための努力をすべきでないということにはなりません。その努力こそが阿弥陀仏の計らいの受け皿となるのです。門徒と阿弥陀仏の計らいが同一であることを結論付ける時に、親鸞聖人はこのようにお考えになられたのです

「あなたの手紙を注意深く読みました。しかし未だにあなたの疑問が生じる道理が分かれません。誓いと名は違うものではないありません。誓いと切り離して考えられる名など無く、また逆も然りなのです。しかし、このように言うためには逆説的に自身の計略に囚われてしまうことになってしまいます(このことを思考する必要はないのです)。ただ単純に、誓いが概念的な理解を超越し心の統一となり名が概念的な理解を越え響きとなる

とならうことに気が付いたならば、どうしてあなたは自身の計略通りに働く必要があるのでしょうか？

意味づけし学習することで理解していることとするあなたの試み全てがむしろあなたを混乱させているように思えるのです。この姿勢は完全に間違っています。ただ単純に誓いと名が概念を越えていると気付きさえすれば、あなたはこれ以上このような計らいをする必要が無いのです。誕生を導く活動において、あなたが今やっていることは全くの無意味なのです。

あなたは敬意を込めてもう一度如来(阿弥陀仏)を信じなければなりません。

親鸞聖人 (親鸞聖人の手紙 ② 誓いと名は同一(より))

私たちは阿弥陀仏の施しや慈悲の受け皿なのです。

自由と慈愛に満ちた人生の中で、その受け皿になることが私たちの目標であり、全てのものの苦しみを止めることに繋がるのだと、私は解釈しています。

それは可能です。「もし」自分たち自身を受け入れるならば。

合掌

マーティン

本稿にお時間を割き思考しながらお読みくださり有難うございます。また、本稿を投稿する機会を下さったトロント本願寺「仏心」にも改めまして感謝いたします。

私たちは皆、念仏の道を歩いているのです。

南無阿弥陀仏

佛心

もし (if) 」

2016年4月

浄土真宗

トロント本願寺

私たちは素晴らしいものを持っています。それはお互いを傷つけあうことも出来、お互いを助け合うことも出来るものです。「それ」とは「コミュニケーション」という能力、端的に言う「言葉」です。

言葉の力はとても大きいです。鼓舞したり、壊したり、形を変えたり、影響を与えたり。

今「言葉に力がある」と言う中で、ふと興味深い疑問が浮かんできました。日々使われている言葉の中で、一体どの言葉が力を一番持っているのでしょうか？私の場合は「もし (if) 」です。

数千もある日常会話中の単語の中で、「もし」という言葉は会話の中でも思考の中でも最大限に効力を発揮しているように思っています。

通常「もし」という言葉は後悔や願望を込めたい場面で使います。「もし違う方法でやっていたらなら」や「もしこんなことやあんなことが起きたなら」など。

私の理解が正しければ、「もし」は親鸞聖人が「計らい」という言葉を使う際にも参照されていたはずで

「計らい」とは計画・分析し行動に移すことを言います。「計

らい」は自力による行動ともいえます。

私たちが「もし」を使う時は自力による計らいを行っており、私たち自身の計略（もしくは願望）に依っているのです。

願望が自分たちに関することであるときは、例えば「もしこんなことが起こったならば」とか「もしあの欲しいものが手に入るならば幸せになれるのに」などと考えることでしよう。

願望が他者に向いている時だと「もし彼らがこんな選択をしたら・行動を取ったら、私は幸せになのに」となるのでしよう。

願望は愛着を伴います。愛着は煩惱のうちの一つで、苦しみを軽減するために抵抗しないと仏陀は説いています。

したがって、自力による計らいによつて苦しみと啓蒙の悟りを啓こうとすることは、終わらぬ苦しみと再生しか導かない無益な行為でしかないのです。

私たちは時々勘違いしてしまうようなことがあります。自分たちは、十分よい又はある特定の「場所」で阿弥陀仏の救いを受ける「価値のある者」でいる必要があると考えてしまいます。それは人間の性でしょう。いつでも前進したいと願い、最善を尽くしたいのです。しかし、「18番目の誓い」を見る限りそのような無駄な行為は必要ないのです。悟りを啓く前に全ての衆生を救うという仏陀の法身 (Dharma-kara) の誓いと、実際にその誓いを実行していく中で仏陀が阿弥陀仏になられた事実が、我々が現に浄土の中に住んでいることの証左となっています。

「私が悟りを啓くとき、誠実さと喜びを持って私に身を委ねる10の地域に住む衆生が、もしも私の世界で生まれ変わりたいと願い、私の名をたとえ10回も呼んだとしても、そのもの達は私の世界で生まれてくるべきではありません。私が完全な啓蒙を